

## ア シ

笹川 通博

フラグミテス・コンミニス、フラグミテス・コンミニス、分け入っても分け入っても、フラグミテス・コンミニス。ここは、豊栄市福島潟の干拓地である。夏の強い日射の中、植生の調査のために、背丈よりもはるかに高いこのアシ原に迷い込んだのである。むっとする暑さだ。こんなのを草いきれ、というのであろう。植物の喘いでいるのがわかるようだ。アシの堅い茎は足にからみつき、かすかにざらつく葉の縁は手の皮を切る。方向は皆目わからない。早く、ここを脱出したいと、気ばかりが焦り、闇雲に進むだけである。はいている腿まである長靴は、既に見事に裂けている。植生はきわめて単調だ。アシ以外には、わずかばかりのミゾソバとカサスゲだけである。福島潟にはかつてオニバスやヒシモドキなど貴重な水草が豊富に生育していたが、国営干拓後約10年たった今日では(1988)、全植被面積約173haの内、大部分の約128haが学名フラグミテス・コンミニスすなわちアシで覆われている。

アシは世界に広く分布し、コンミニス(communis: 普通な)という種小名もそれを表し、この植物を知らぬ人はおそらくいないであろう。主に湿地に群生するが、かなり乾燥した土地にも生育する。高さは成長すると3mを越え、秋に見事な穂(花序)をつける。和名のアシは稗(はし)の変化したもので、ヨシとも呼ぶのは、アシが「悪し」に通じるのを嫌い、その逆を使うようになったからという(牧野新日本植物図鑑)。近縁種には茎が地上をはうツルヨシや、アシより大きくなるセイタカヨシがある。

日本のことを「豊葦原の瑞穂の国」というのは、人々の生活する場所が古くから湿地であり、アシが多く生育したからと思う。国名にも使うほどであるのだから、古代の人々はアシに親しみを持っていたのであろう。あるいは、茫々たる



アシ原を開墾するために非常に苦労したことが国名に表れたのかもしれない。アシの豊富に茂る湿地は、恵み多い水田への可能性を連想させる。「葦牙(あしかび)」というおもしろい言葉もあり、これはアシの若芽のことである。福島潟では質のよいアシを生育させるために、火入れをしたことが知られており、一部では今でも行なわれている。これは、アシをよしず等の生活用品に利用するためである。日本の生活や風景に、アシは欠かせない。

イギリスの作家、オスカー・ワイルドの有名な童話『幸福な王子』に登場するツバメはアシに恋をしていて旅立ちが遅れた。ツバメはアシを連れて南国へ行こうとするが、彼女は風になびいてばかりいて、一向に態度をはっきりさせない。業を煮やした彼は、彼女を置きざりにするが、時既に遅く、仲間がみんな去ったあとであった。そのあとにツバメは「幸福な王子」に出会い、貧しい人々に王子の体にある宝物を分け与えるのである。「人間は考える葦である」という言葉は、風になびくアシのような、人間のいかにも頼りなげな様子を表している。パスカルは「考える」ということに人間の尊厳を見出したようだが、僕らが生きている時代は風があまりにも強いように思う。

それにしても福島潟のアシ原はものすごい。干拓以前には、これほどの広さではなかったとみられる。新潟市の鳥屋野潟や佐潟でも、以前には今程、アシは繁茂していなかったとき。これはおそらく、湖沼や湿地への人間の働きかけによって環境の変化に弱い植物が衰退し、強いアシがはびこるようになったからであろう。アシそのものは決して感じの悪い植物ではない。むしろ風情があるようにも見える。問題となるのは、湖沼や湿地にアシだけが群生し、他の湿生植物や水生植物が見られなくなることにある。あるいは、アシが生育するだけまじいのかもしれない。

世界に広く分布し、古今東西の人々に親しまれ、我々の生活や心に深くかかわっているアシ。この植物の著しい繁茂の裏に、憂えるべき問題がある。フラグミテス・コンミニス、あまりにも身近すぎて忘れがちな植物であるが、この繁茂をアシとするかヨシとするか、深く考えてみなくてはならない。

(新潟県立向陽高等学校)